破鞋（はあい）

雪門玄松の生涯

水上勉

岩波書店

破鞋—雪門玄松の生涯

一九八六年一〇月一七日　第一刷発行©
一九八六年一二月二三日　第四刷発行

定価一三〇〇円

著者　水上勉（みずかみつとむ）
発行者　緑川亨

発行所　〒101 東京都千代田区一ツ橋二-五-五
株式会社　岩波書店
電話　〇三-二六五-四一一一
振替　東京六-二六二四〇

印刷・精興社　製本・松岳社

Printed in Japan
ISBN4-00-001855-8

落丁本・乱丁本はお取替いたします

1

雪門玄松のことを書く。

この和尚の名をはじめてきいたのは、十三、四歳の頃で京都相国寺でだった。私は、山内塔頭の瑞春院の徒弟で、昭和五年に厳修された大懺法会の香華役をうけ、山内長得院の小畠文鼎師のもとに通って、声明を習っていた。香華というのは、得度直後の小僧の中で、年少の者にふりあてられる役で、法会当日、柄香炉をささげ、老師たちの先頭に立って、誦経を先唱するのである。「蚊の鳴くような美声でなくてはならない」と「相国寺史」にあるが、そんな大役が美声でもない私にあたったのは、年少のせいだった。とにかく、一ヶ年ほど長得院へ通いつめた。竹藪にかこまれた当時の同寺の隠寮へゆくと、とっくに七十すぎておられた文鼎師が、のど仏のたれた長い首をのばして、すぐに経本をひらいて、節まわしを教えられる。その一服の時だ。

向いあっている私に、
「お前さんの国は若狭ときいたが、村はどこやったか」
「若狭本郷です」
「そしたら、雪門さんを知っとるじゃろう」
「いいえ」
はじめてきく名で、何のことかわからない。
「摩訶般若の雪門さんじゃ」
「はあ」
「犬見に海印寺という寺があろ」
「はい、村は存じておりますけど寺のことはよく知りませんが」
犬見という半島の小部落は同級生もいたのでよく知っていた。だがそこの寺のことは知らなかった。その日瑞春院へ帰って、師の山盛松庵和尚にこの話をした。
「何でも摩訶般若ですまされた大和尚での、わしが子生(こび)の蔵身寺(ぞうしんじ)におる時によく逢うた。着たきりすずめの乞食三昧の老師さんやった」
どちらの師匠も、雪門和尚のことを、あきれた人、あるいは風変りな人じゃった、という眼

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

もとを子供の私に投げられた。瑞春院の松庵師は、同じ若狭の子生で住職されていたので、雪門和尚の住んだ和田、犬見と近く、また、田舎のことゆえ、寺づきあいや、役僧で鉢あわせする機会もあったらしかった。若狭の村に、むかし風変りな着たきりすずめの老師さまがいて、何事も摩訶般若一巻ですませ、ほかの経はよまず、京の本山にまで名を馳せていることが、それでわかったのであるが、子供のことだから雪門玄松の名がふかく印象づけられたわけでもなかった。話に出れば、ああそうか、と耳かたむける程度で、関心のふかまるのは、ずいぶんのちである。いまから思うと、あれこれきいておきたかった思いもする。が、十三、四歳では関心も淡くて当然だ。小畠文鼎師は、臨済宗派では学僧で名を馳せ、有名な「続禅林僧宝伝」の著者である。のちに紹介するが、雪門玄松伝と名づけられる文章は、この本に出てくるぐらいで、ほかにはないだろう。さいきん石川県宇ノ気の西田幾多郎記念館から刊行された上杉知行氏の「雪門禅師と西田幾多郎」ぐらいか。

知る人も少ないから、ことついでにいっておけば金沢出身の鈴木大拙、西田幾多郎の両禅哲がまだ金沢に住んだ青年期、「禅とは何か」をたたきこまれた人だといえば関心をもつ読者はあるかもしれない。鈴木大拙が青年期をふりかえる「也風流庵自伝」に、北条時敬に禅の感化をうけ、国泰寺へ雪門和尚を訪ねるくだりがある。

「今から考えてみると実に乱暴な話だ。初めて和尚に逢うというのに、誰からも紹介状をもらわず、また国泰寺がどこにあってどう行くということも知らず、とにかく高岡の付近だから行けというので、向こう見ずに行ったわけだ。越中と金沢との境にある倶利伽羅峠を越えて行った。五、六人乗りのガタ馬車があってそれに乗ったが、道が悪いし馬車が悪いものだからがたつくたびに車の天井で頭を打ったことを覚えておる。高岡から先は歩いたように覚えておるな」

秋月龍珉氏の「人類の教師鈴木大拙」からの借用だが、語り調なのは、秋月玲子夫人が大拙が語ったのを復文されたからだ。それだけに当時の様子が生々とつたわるのである。

「とにかくそうして国泰寺について参禅したいというと雲水の坊さんが出てきて、和尚は留守だが、参禅をしたいならここにおれ、ということになって一部屋くれた。別に僧堂というようなものはなかったように思う。そこで坊さんに坐禅はこういう工合にするんだといって教わって、そのとおりにその晩から坐った。眼はつぶらず半眼にして、たたみ三尺の前方に視線を落すということだの、呼吸はどうするということだの教わって、坐ることを習ったわけだ。(略)その次の日か次の次の日かに雪門和尚が帰ってこられた。帰ってこられると坊さんがきて、和尚さんに会えというので、そのとき初めて禅の老師という人に相見したわけだ。禅宗というも

のがどういうものだかさっぱり知らず、参禅の作法も何も分からずに、会えというから会いに行ったわけだが、今から考えると無茶苦茶な話だ。「遠羅天釜」を一冊持っていたから、それを持って行って質問した。「遠羅天釜」は「かな法語」だから、邦文で書かれていてやさしい本のようであるが、中にはやはり専門の禅宗用語が出てくるので、分からんことがいくらもある。そこで禅語か仏教語か二つ三つ、これはどういう意味ですかとたずねたわけだ。そうしたら和尚大いに怒って、「なんだ馬鹿な、そんなことよせ」と言って頭から大目玉をくった。せっかく相見したものの、そういう工合で、叱られて放り出された。文字の意味がどうのこうのと聞くより、とにかくまず坐れということであったろう」

大拙はこの時学生で、十八歳であった。倶利伽羅峠も下駄ばきで歩いたといわれている。がこれだけでは、雪門玄松の風貌骨格はよくうかんでこない。鼻っ柱を折られてすごすご帰ってきた大拙には、ただこわい和尚と見えた様子で、

「それからまた部屋に帰って坐禅をしたが、ただ坐禅しろと言われても何をどうしていいのか手のつけようもなし、雲水の坊さんもご飯を運んでくると黙って出てゆくだけで、何を教えてくれるというでもなし、きわめて不愛想であるし、まるっきりそのままうっちゃらかしにして、何一つ説明したり教えたりしてくれない。それで、どうしようもなくて、四、五日ぐらいで

家に帰ってしまった」

とある。先にもいったように雪門について書かれた文章は少ないので、貴重な文献といえるのだが、大拙が「遠羅天釜」を見せて、禅語の一つ二つを示しどう解したらよいかときくのを「馬鹿な」ことだと叱りつけ、とにかく坐れというあたりに、多少の風格はうかがえるのである。

大拙と同年生れで、同じ金沢で北条時敬に教わった西田幾多郎もやはり学生時から禅にひかれた一人だ。卯辰山の洗心庵に雪門を訪ね、坐禅を教わり、大拙よりは縁もふかくなり、終生気に入ってつかった寸心という号も、雪門からもらっている。雪門は、和歌山市の出であるが、一説によると幼名を道津寸松といったそうで、自分の「寸」の字を西田に与えたといわれている。西田が雪門の庵へ参禅するのは大拙と同じく北条時敬に紹介されてだからふたり一しょに行ったこともあったろうし、洗心庵にうつられてからは、大拙の方は東京へ出ているので、西田の方が、ひんぱんに卯辰山に出入りしたのであろう。岩波版西田幾多郎全集「寸心日記」をみると雪門和尚の名は何度も出てくる。雪門はつまり鈴木禅学、西田哲学を研究する人々にはまたいで通れない人ということになる。

ところが、鈴木、西田は有名な学者で研究者も多いのに、師の雪門を語る本は皆無に等しい。

そこで小畠文鼎師の「続禅林僧宝伝」を繰ってみた。次のように紹介される。小畠文は漢文で読みづらいので、まちがっているかもしれぬが私流に読みくだしてみる。

師の諱は玄松で、字は雪門である。蟠龍窟または通玄廬と号した。紀州和歌山の人である。道津という代々の素封家に生れた。父の名は喜兵衛。師はその長男で嘉永三年庚戌の年に生れた。幼にして出塵の志を発し、紀州寒川の安楽寺に入って廬山能公和尚を師として得度をうけた。四書五経を学び、奈良・京都をはじめ、各地の禅僧を訪ねて経論をおさめた。明治六年二十四歳で、京都の相国寺荻野独園に侍し、遂に印記をうけた。明治十五年四月に中国へわたり「徧く名山に登り深く道源を探らん」とした。独園和尚は、彼の地の碩匠に紹介状を書き、餞別の辞を贈った。「私は嘗てこんなことをきいた。彼の中国は明の終りになって少林曹渓の宗旨が衰え、臨済や曹洞の活機も滅びてしまった。今や若し、彼の国の宗師たちが、曲指人心説性成仏と唱えるようならば、則ちたとい弁は富婁那に過ぎ行は顔閔に勝っていても、老僧は横点頭をしないということである。だからこそ玄松よ、お前はそこをしっかり択えてきなさい」。

玄松は中国へ渡る。だが、三年いて還ってきた。

越中国泰寺五十三世実応是三和尚が独園和尚に後継者の推薦を依頼してきた。独園は越叟義

格を推薦した。だが、その越叟が若死にしたので、実応和尚は再度の推薦を請うた。独園はそこで、雪門を推した。明治十七年十一月である。雪門は国泰寺の住職となった。

雪門の道声は四囲にひろまり、禅を学ぶ者が集まった。加賀の居士本多政正は、独園に参禅していたので雪門に謁した。極寒の最中だった。雪門は二上山の蔵王殿に入って、坐禅していた。居士は朝夕雪を踏んで二上山に通ったという。このように訪道する者がふえたので雪門は洗心会をおこし、富山、高岡、金沢、伏木を来往した。また諸方の教化にも出むいた。国泰寺は負債も多く衰弊の極にあった。師は勤倹節約を弟子に求め、自ら寒素を守り食事も雲水と同じだった。よく托鉢にも出た。人々は感嘆して布施も集まった。そこで師は寺務を整理し、天皇殿を重建した。後醍醐、後奈良、光明の三皇閼宮である。二十二年九月のことだ。独園禅師を招請して槐安国語の大会(たいえ)をひらいた。独園は会を終えて下山する時、雪門に次の偈をあたえた。

擎鉢垂囊帰暮烟
拾柴喫菜幾多年
北方仏法今誰在
宗鼎千鈞付半肩

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

鉢をささげふくろを垂れて日暮れに帰る。柴を拾い菜を喰って幾多年。北方の仏法今誰か在る。宗鼎千鈞半肩に付す。二十六年に開山聖応国師忌および光明天皇御忌。独園禅師を高岡に迎え、天龍、相国、大徳、妙心の四大道場の老師をも招いて、夏をむすび、碧巌会を催した。盛大な行事が終って、参会の衆を山門に送ってから、法堂に上って退鼓を打ち、師は退山の偈を唱えた。とっさのことなので、堂にいる者はびっくりした。師がかねてから考えていたことで、国泰寺を退くというのである。在職十年。大本山国泰寺に別れを告げて、さっさと金沢にきて、卯辰山の洗心庵に入った。その時の偈にいう。

此地に居を定めて塵埃を離れた
眼に見る雲山の意気の嵬きことを
人間を忘却し終日坐禅せば
花を啣む百鳥は空しく徘徊している

この風格を慕ってくる弟子がふえた。雪門は「報本教会」を開いて教化する。摩訶般若波羅蜜多を称念せよ。心口相応じて、これを唱えれば、すなわち衆生本来仏也とわかる。報本教会の趣旨だった。たまたま、和歌山にある実家で、嗣ぐ者が絶えたので、長男の師は帰郷家事再興にあたる。明治三十二年のことである。師は還俗して世俗人となった。だが大正二年十二月、

再び、僧籍にもどり、若狭国、高浜和田の真乗寺に駐錫、寺主の木下越宗が国泰寺で雪門の侍僧をしていた縁で、真乗寺に入ってからは、高浜、小浜の間を往還して、参禅会をひらき、報本教会を設けて、出家者、在家者を問わず指導して歩いた。大正四年春、近くにあった本郷村海印寺で宗乗を挙揚、五月に発病したので、療養の為に六月に真乗寺へ入った。腹膜炎であった。八月四日、次の偈をのこして怡然として六十六歳で逝った。

摩訶般若波羅蜜
六十余年遊戯場
末後更に一句子無し
眼光地に落つ活商量

ざっと以上である。文鼎師の調べによると、金沢洗心庵から、和歌山へ帰り還俗されていることになる。管長師家といえば最高位の人だが、とつぜん、寺を捨てて小庵にこもる行動だけでも尋常でないが、卯辰山では、北条時敬や、西田幾多郎を指導したあと、和歌山へ帰って俗人になって諸所を放浪、ふたたび、僧侶にもどって、弟子の住んでいる若狭に辿りついて、そこで「着たきりすずめ」の乞食行脚をつづけ、半島の小寺に住み、腹膜炎をおこして急死して

いる。

この大正四年は、鈴木大拙はアメリカから帰って、学習院の教授だった。西田幾多郎は京都大学教授、「善の研究」「思索と体験」の著述後で、多忙をきわめた年まわりである。ふたりの弟子が、それぞれの学問をふかめて、出世していたのに、師は若狭の孤村で乞食放浪だった。その死について、学者たちはどう対したろうか、と、「也風流庵自伝」「寸心日記」を見ても追悼の文は出てこない。テレビもラジオもなく新聞もゆきわたっていない頃のことだから、ご両人とも知らされなかったともうけとれる。孤独な死である。ここらあたりに、関心をそそられる。私ばかりではない。下村寅太郎氏も西田幾多郎全集第八巻付録月報「雪門老師のこと」の中で、

「西田先生が、金沢時代、十年間、読書思索と同時に、雪門老師に参禅、刻苦精励されたことは、日記につぶさに記されている。しかし老師は遂に先生を印可しなかった。十年苦修した先生を通さなかったということによって、雪門老師は特に我々に深い印象を与える。（略）

因みに、雪門老師遷化の大正四年八月前後の先生の日記をしらべたが、何の記載もない。この前後の日記は殆ど全く空白である。しかし、八月二十日頃、若狭の海印寺の住職から雪門老師の逝去の通知を受けたこと、併せて老師との最後の面接のことが、同年九月十二日、広島在

住の堀維孝氏宛書簡に記されている。堀氏は金沢時代の同僚で、爾来親交があった。当時広島高等師範学校の教授。

……雪門老師のことについては　実は昨年の暮頃なりしと覚ゆ　同老師突然拙宅に尋ねられ　久しぶりのこととていろ〳〵話いたし居り候中　石川君も偶然来訪　三人晩餐を共にし夜まで話いたし候　其時老師の話に　今度従来の関係を全く絶ち　余生を道の為に尽さんと思ふ故　何処か京阪の近傍に居たしとの事にて自分の働くのはこれからなりなどいはれ大元気に見え候　其後若州の方の寺に滞在の旨通知有之候　然るに八月二十日頃なりしか若州の大飯郡本郷村海印寺の住職より　突然雪門老師が八月四日朝遷化の旨通知有之　小生も実に其意表外なるに驚きたる次第に候　聞く所によれば腹膜にて逝去せられたる様に候　人生の無常今更の様に感じ候云々」

これだと西田幾多郎も前年末以来、雪門には会っていない。和尚のことは若狭に住んでおられるらしい、とわかっていても、訃報のくるまで、晩年在住の犬見の海印寺すら御存じなかった。

2

犬見の海印寺は、正式にいっておくと、福井県大飯町字犬見区の坪という所にある。曹洞宗永平寺派で、町内父子(ちいし)区の海元寺末ということになっている。曹洞宗派ゆえ、当然ながら雪門和尚のぞくする臨済宗派ではないのである。犬見区は二十五世帯しかない。みな海印寺の檀家だが、伽藍といっても、十段ほどある石段をのぼりつめた山の台地に、本堂、庫裡が棟つづきに建ち、背山は急傾斜の雑木林で、そこが墓所になっている。斜面なので、墓石は段になり、ソロバンをたてかけたようだが、観音堂はその墓の中央にある。開祖は端翁祖的といい、元和元年の創立だから、古い方だ。だが、若狭は、古寺が多いゆえ、元和では古いとはいえないかもしれぬ。いずれにしても、二十五戸の仏事だけでは喰えないので、住職は昔から、何やかやして働いてきたようだが、大正二年雪門玄松が、ふらりとここへ現れた時は、粟谷一如という

住職がいた。一如は四十歳前後で、小寺にかかわらず、のちに三人の小僧を持つことになったのは、一如に力があったからで、彼は永平寺派でも布教に才があり、若狭一円の同派教区ではめずらしく妻子を持たず、家事には尼僧を入れ、化導専心の住職だった。弟子は一玄、一道、一翁といい、雪門入寺の頃は、一玄が小浜中学一年生で、一道は幼少、一翁はまだ入寺していない。二人は殆んど雪門和尚の記憶を失なっているが、辛うじて、中学生だった一玄だけが、一如亡きあと雪門玄松の姿に接し、その思い出を語れるわずかな人というしかない。私はこのことをきいて、海印寺に現住職滝川一翁師を訪れ、話をきいたあとで同寺の背後の寺墓地にある雪門玄松の墓石に先ず詣でた。

墓は、同寺歴代住職で、この寺で遷化された方々の墓石群にまじってある。正直、これが墓か、と首をひねりたいほど粗末なものであった。五輪といっても、どこかそこいらから拾ってきたものを代用に置いたとしか思えない、一尺そこそこの、五つの段になったぼろぼろ石で、台石もないもり土の上につきささっているだけ。花立てが二本と、石の供物台、これとて、そこいらにあったものでまにあわせたと思える平らな自然石が一つ置いてあるだけだ。墓石には彫字も何もなかった。

「これが雪門老師の墓です……わたしら子供のころから、ここへきて墓経をあげてきました

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com